

ソード・アート・オンライン 罪と罰

さいきん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

急遽、デスゲームとなつたソードアート・オンライン。
ゲーム内での死は、現実世界の死に直結する。

何も知らない少年は罪を犯し、自ら罰を求めた——
(大まかな方針のみ決めていますが、バッドエンドです)
(なるべく原作に関わりません)

僕の
罰

僕の
罪

目

次

14 1

僕の罪

周囲を見渡すが、誰もいない。

五時半の鐘の音が聞こえた瞬間、僕は何もない部屋に飛ばされた。

部屋というよりは牢獄に近いかも知れない。壁も床も石造りの煉瓦で、窓も扉もない。

突如、目の前にウインドウが表示された。

はじまりの街が映っている。

そこには大勢のプレイヤーが集められていた。そこに映るカーソルは、緑一色だつた。

ソードアート・オンラインではプレイヤーの頭上にカーソルが表示される。

僕の頭上のカーソルは赤い。それは他プレイヤーを手にかけた犯罪者の証だ。

βテストの時代から、PK（プレイヤーキル）を行ったプレイヤーは『レッド』と呼ばれていた。

レッドは安全地帯、いわゆる圏内に入ることはできない。

おそらく、全プレイヤーが一か所に集められる予定だったのだろう。

しばらくして、茅場昌彦の演説が始まった——

僕は普段からゲームをしなかつた。

別にそれそのものを否定するつもりはない。

楽しむ人がいるのはわかる。

単純に興味が持てないだけだ。

どちらかというと、実際に体を動かすほうが好みだった。

しかし、ソードアート・オンラインは違った。

世界初のVRMMORPG。
仮想現実への完全ダイブ。

これらの言葉に胸を躍らせた僕はパソコンをチエックし続け、βテスターの権利を勝ち取つた。

待ちに待つた初ダイブ。

右手に剣の重さを感じる。

草木を揺らす風の音、目が眩むほどの大太陽。

全てが現実に感じる。

これが本当にゲーム？正気か？

仮想現実は現実以上に驚きに満ちていた。

仲間との協力、モンスターとの熾烈な争い。

昨日のことのように思い出すことができる。

あいつら、今日もログインしてるのかな——

「——まあ、外見が違うしわからないだろうけどね」

今日からSAOは正式にスタートした。

前回の経験を活かし、僕のアバターは現実の姿とほぼ同じだ。

体格を変えると、いつも通りに動くことができない。

β での教訓の一つだ。

「ロージャ？集中しないとやられちゃうよ！」

「こんなところでやられたら、 β テスターの名折れだよ」

ソーニヤに軽口を返す。

彼女はβ時代からの友人だ。

ひよんなことからパーティを組み、意気投合した。

僕と同じでゲーム初心者だが、仮想現実への興味からソードアート・オンラインを始めた。

「将来的にはギルドをつくりたいよね。皆で楽しく、ワイワイやるのがゲームのだいご味でしょ！」

イノシシのようなモンスターを斬り捨て、ソーニャは笑った。

彼女は運動が苦手だが、雑魚くらいなら問題なく倒せる。

「……全員がそう思つてればいいけど。少し下がつて」

首をかしげるソーニャを後ろに、僕は剣を構えた。

視線を目の前の茂みに向ける。

「出て来いよ、1対1で相手してやるから」

返事はない。

茂みが一瞬ゆれ、男が姿を現した。

屈強な見た目で、右手には背丈ほどの斧が握られている。

ぎよろりとした眼で周囲を見渡すと、ため息をつき、あきらめたように斧を投げ捨てた。

「ほら、ソーニャ。こういう輩もいるんだ。みんな仲良くなつてのはゲームでも難しいよ」

「はいはい、わかつたわかつた。何でかなあ、絶対そのほうが楽しいのに」

むすつとした表情の彼女は、責めるような足取りで男に近づいた。

「悪かった。降参だ。やつぱりPKなんてするもんじやない——」

瞬間、男は腰から短剣を取り出した。ノーモーションで振り上げる剣先は、ソーニヤを見据えている。

「な！」

短剣が振り下ろされる。するどい金属音が鳴り響く。

男は口角を上げ、そのままガラス片状に砕け散った。僕の右手には、男が落とした斧が握られていた。

PK。男からの攻撃を受けていなかったため、僕のカーソルは赤く染まつた。システム

上、先に手を出したほうが犯罪者である。

「…碌な奴じやなかつたな」

何とも言えない後味の悪さが残る。

頭上のカーソルを見て、更に気が滅入つた。。

「大丈夫？」

振り返ると、ソーニヤはその場にへたり込んでいた。

「ロージヤ、ありがとう：私、もう少しで」

「まあ、ゲームでよかつたよ。なるべくPKはしたくないけどね」

「ごめんね、私のーー」

言い終わらないうちに、鐘の音が鳴り響いた——

「……嘘だ」

「……嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ」

手が震える。足には力が入らなくなり、その場に膝をつくように倒れた。

僕は震える体を自ら抱きかかえた。

『ゲーム内で死亡したプレイヤーは、脳がナーヴギアによつて破壊される』

確かに茅場はそう言つた。でもこれはゲームだろ？何かしらの蘇生手段があるんじゃないのか？もしも全て嘘だつたら？そうさ、そうに違ひない！初日から大掛かりなことをするなあ!!信じたくない。本当？いや、これはゲームのはずだ！

血眼になつてメニューを見る。オプション、持ち物、装備、ステータス、すべての項目を探しつくす。

どこにもログアウトボタンはない。

代わりに、覚えのないスキルを見つけた。

『業：外見、ステータスを変えることができる。（今までPKした相手の外見やステータスを参照する）』

「…なんだよ、これ」

まるでチートだ。いや、そうじやない。このスキルは明らかにPKを前提としている。

もう認めるしかなかつた。

じやあ彼は——

「僕が殺したんだ」

「僕が真っ先にPKした」

「この世界で最初の犯罪者だ」

はじまりの街は騒然としている。

突然のデスマゲーム開始の知らせに怯え泣き叫ぶ者や、現実を受け入れずに空元氣で笑う者も見える。

しかしその内容までは、僕にはわからない。

耳に入つても来ない。

僕はただひたすら、自問自答し続けた。

僕は罪を犯したのか？

僕の罰

どれだけの時が経つんだろう。

気が付くと、見覚えのない所に立っていた。

慟哭しながら、僕は走った。

行く当てもない。

戦う気もしない。

でも、死にたくない。

ひたすらに逃げ続けた。

でも、逃げれなかつた。

罪の意識は、どこまでも迫つてくる。

では、この罪はどのように償えればいいのだろうか——僕は自問する。

「僕が殺さなければ、ソーニャは殺されていた」事実である。

「僕は男を殺した」これもまた事実である。

「彼女を守つたことは罪か？」罪ではないだろう。

「男を殺さず彼女を守ることはできたか？」

——あのタイミング、あのスピード。男を殺し、碎かなければ、確実に短剣は彼女に届いていただろう。

しかし、これを正当化することはできなかつた。

思わず空を見上げる。曇天からは小雨が降り注いでいた。

頬が濡れている。

それが雨なのか、涙なのか。

僕にはわからなかつた。

雨が止むと、小さな水たまりができていた。

鏡面となつた水をのぞき込み、僕はスキルを使つた。

とたん、鏡像が変わる。

そこに見慣れた自分はない。背の高い、屈強な男性が経っていた。

年は20代後半ほどだろうか。肌と紙は浅黒く、髪が逆立っている。

僕が殺した男だった。

「こいつは、罪人だ」

鏡像に言う。誰が？僕が言っているのか？

口が勝手に動くように感じた。

「こいつは人を殺そうとした。明確な意思をもつて」

鏡像と眼が合う。殺氣立った眼だ。不快感を感じる。

「お前が死ぬのは、仕方のないことだ。殺そうとした者は、殺されても文句は言えない」

仮想現実だって現実だ。僕は言い聞かせるようにつぶやいた。

続いてスキルを解除する。

鏡像は再度姿を変える。そこには少年が立っていた。

髪は長く、その隙間からはどんよりとした眼がのぞいている。

「こいつは人を殺した。明確な意思を持たず」

「お前は罰を受けなければいけない」

僕にできる贖罪とはなにか？このスキルの意味は？

僕は一つの答えを出した。

「僕は、いや、俺は——」

再びスキルを使う。

「レッドを殺す」

僕にできること。それは罰を受けることであり、罰を与えることだ。

おそらくこの先も、プレイヤーキルは発生する。アイテムの奪い合い、閉鎖空間での異常。人間は清くも正しくもない。

僕は彼らに罰を与える。

もう手は汚れている。この先何をしようが、僕が誰かを殺したという事実は変わりようもない。

ならば殺す。殺されてもいいものを。仕方ないものを。そして——

「必ず殺される」

人を殺すものが生きていいはずがない。いつかレッドに殺されるその日まで、僕はレッドを殺し続けようと思う。

「お前もそれでいいだろ?」

鏡像は笑みを浮かべ、僕を見つめていた。